



—チェルノブイリとフクシマを結んで—

チェルノブイリ原発事故33周年の集い フクシマ事故8年, これからも共に歩むために ～フクシマの想いを聞く・語る～

** プログラム **

1. <事務局報告> チェルノブイリとフクシマを結ぶ
2. <対談> 野口時子さん、佑芽さんを迎えて
～母娘で語る フクシマ事故8年の体験と想い～
3. 質疑応答・討論

ベラルーシ民芸品などのバザーあり！！

* 4月21日(日) 午後1:30～4:30

*大阪市立総合生涯学習センター/

第1研修室 (大阪駅前第2ビル/5階)

資料代: 800円 (学生400円)



フクシマのお母さんたちとチェルノブイリ被災地の医師らとの交流 (2012年「3a 郡山」にて)

<問合せ>

072-253-4644(いのまた), 0797-74-6091(たなか)

e-mail: cherno-kansai@titan.ocn.ne.jp

チェルノブイリ原発事故から間もなく33年を迎えます。チェルノブイリ被災地では今も放射能汚染が続き、人々を被ばくから守るために国の責任で、環境放射線や食品放射能モニタリング、住民の健診などが続けられています。また、事故の記憶を風化させず、次世代に語り継ぐ努力もされています。

一方、事故から8年を迎えた福島では、廃炉作業、放射能汚染・廃棄物、健康管理・医療保障、賠償・生活再建、等々、課題が山積していまするにもかかわらず、政府は「風評払拭・リスクコミュニケーション強化戦略」の下、福島事故の被害をなかったことにしようとしています。そして、放射能汚染や被ばく被害に対して不安に思っている多くの人々が声を出せない雰囲気ますます広がっています。

事故後、様々な事情で福島に住み続ける選択をし、不安を抱えながら暮らし続けてきた人々、子どもたちを守るために学び、活動してきた人々。「集い」では、そんなお母さんのひとりである野口時子さん、そして長女の佑芽さんをお招きします。福島事故8年の体験と想いを共有し、またチェルノブイリと福島を結んで、これからも私たちに何ができるか...ともに語り合いたいと思います。ぜひご参加下さい！

福島からのゲスト：野口時子さん・佑芽さん母娘のプロフィール：



野口時子さん

2011年3月11日、東日本大震災・福島原発事故発生当時、野口時さんは専業主婦で、小学5年の娘（佑芽さん）、幼稚園年長組の息子、単身赴任中の夫の4人家族で福島県郡山市に暮らしていました。3月15日東京電力福島第一原発2号炉爆発の情報を受け、家族で実家の岩手県に一時避難しましたが、約一ヶ月後に郡山に戻りました。

同年6月、放射能の不安に悩みを抱えた子育て真っ最中のお母さんたち6人で集まり「子どもを守りたい」想いを話し合い、『安全・安心を求めて行動する会』を発足。10月に『3a!郡山』(3aは「安全・安心・アクション」)を結成し、時さんはその代表となりました。『3a!郡山』では、安全・安心な生活の確保のために、日本各地や海外の人々とネットワークを築き、多様な分野の関係者の協力や支援を得ながら子どもを守る活動を展開。「お野菜マルシェ」(西日本産を中心に安全・新鮮な産直・有機野菜を販売)、「健康診断の費用補助」「放射能測定」「保養情報の提供」などに取組んできました。



野口佑芽さん

2012年「救援関西」の招聘で来日したベラルーシのチェルノブイリ被災地の小児科医ベーラさん、元教師ヴァーリャさんが福島を訪問した際に『3a!郡山』でお母さんたちと交流したことが、「救援関西」と野口さんたちとの交流の始まりでした。

2018年1月『3a!郡山』は「発展的解消」。時さんは、福島県で初の『福祉型専攻科 カレッジ郡山』の立ち上げに参加し、現在、将来息子が生活できるような施設の充実を目指しながら、日々試行錯誤、奮闘されています。

佑芽さんは、中学卒業まで郡山市で過ごし、岐阜工業高等専門学校に進学。現在19歳で建築科3年。2015～16年には、AFS(American Field Service)62期生、「みちのく応援奨学生」としてフランスのテヴィエ(アキテーヌ地方ドルドーニュ)の高校に8ヶ月留学。フランスの友人たちにも福島事故被災の体験を語りました。

～福島を訪問しました～

3月16日・17日に福島県中通りを訪問しました。まず、福島市で行われた「2019 原発のない福島を！県民大集会」に参加、その後、政府交渉9団体の意見交換会にも参加。翌17日は雪山を見ながら南下し、三春町の福島県環境創造センター 交流棟「コミュニティショップ」を見学、ついで同じ三春町にある「コミュニティショップ えすぺり」で昼食と買い物をしました。

「えすぺり」は昨年12月「保養をすすめる関西ネットワーク有志」がお招きした人形劇の劇団「赤いトマト」の大河原さん一家が運営するコミュニティショップで、訪問を楽しみにしていました。店内



にはお雛さまや写真、人形が飾られ素敵な空間。丁度昼食時間だったので、大勢のお客さんが賑やかにお喋りしていました。昼食はスペシャルメニューの「それいゆ定食」・・・カボチャのスープ、お豆のたっぷり入った野菜サラダ、それにハンバーグ、一分つきのご飯。期待にたがわぬおいしさに、みんなで舌鼓をうちました。隣の部屋には新鮮な春野菜が並べられ、さらにパン、ハチミツ、油など思わず手が伸びるような食品が勢ぞろい。大河原多津子さんはそのお店の奥で、ゴボウの販売のための準備をしていました。「原発事故は私たち世代の責任」と話されるその眼には思わず涙がにじみました。事故が起こる前に原発を止められなかった無念の思いを垣間見た思いがしました。お店の奥には、幸せがこぼれ落ちそう大きな大きな絵。長男海君夫妻の結婚衣装姿です。海君がお父さんの伸さんとあまりにも似ているので、伸さんがひげを生やしたというエピソードには思わず笑いました。

その後、郡山市に移動し、野口時子さんにお会いして4月の集会に関してのお話を伺いました。日々忙しく働いておられ、生き生きと過ごされているお話に私たちも元気をいただきました。

是非4月21日の集会にご参加ください。乞うご期待！

(猪又雅子)

「2019 原発のない福島を！県民大集会」

この「県民大集会」は、以下の3点を原発事故の被害を受けた福島県民の「訴え」として2012年から毎年開催されてきました。

- 1) 東電福島第二原発を廃炉とし、福島県では原子力発電は将来にわたり行わず、福島県を再生可能エネルギーの研究・開発及び自立的な実施拠点とすること。
- 2) 放射能によって奪われた福島県の安全・安心を回復し、県民の健康、とりわけ子どもたちの健やかな成長を長期にわたって保障すること。
- 3) 原発事故に伴う被害への賠償、及び被災者の生活再建支援を、国と東京電力の責任において完全に実施すること。

あの年を入れると9度目の春、8回目の県民大集会。2019年3月16日、福島市の県教育会館に、県内外より1700人が集いました。

はじめに、角田政志実行委員長が、現状と課題について報告しました。

第二原発の廃炉について、東電は「廃炉の方向で検討する」と表明し、運動の成果で前進を勝ち取った。しかし、一方で、原発事故の関連死は増え続け、故郷を奪われ避難している人も4万人以上いる。国の方針で意図的に意識の風化が進められ、復興支援の打ち切り、ADRの打ち切りが進んでいる。

農林水産・消費者団体では、失われた信頼を回復するために努力をしている。水田の除染が進んでいるが、消費には結びついていない現実。農協は米の全袋検査を続けている。国はモニタリングポストの撤去をしようとしているが、モニタリングを続けることが必要。漁業では、トリチウム水の海洋放出が差し迫った問題になっている。これは福島だけではなく全国の問題である。漁業も再建をめざしている。試験操業の魚類は放射能が検出されないにもかかわらず、福島で水揚げされたものは敬遠されている。また、検査の設備のある場所に運搬するためのコストがかかる。林業では、18万ヘクタールが影響を受けた。森林は除染が難しく、作業員は不安なまま作業している。山菜やキノコ類はまだ駄目なまま・等等、厳しい現状を報告しました。

ゲストの香山リカさんの発言が続きました。

(私は)母子避難の心の苦しみを聞くことも多く、福島の現状が厳しいことを知っていても、東京では、「もういいんじゃないの」「そっとしといた方がいいのでは」と言われることがある。意図的に事故がなかったかのようにされようとしている。原発への反省もない。私は北海道の出身で家族は北海道に住んでいる。昨年の胆振の地震の時は北海道全体がブラックアウトになった。家族は泊原発が無事か、真っ暗で情報も途切れる中で非常に心配していた。日本全国でいつ大きな災害が起きるか分からない。そのたびに原発が大丈夫か心配になる。福島からも全国からも「原発いらない」の声を上げ原発のない日本を作っていこうていこう。

被災した住民として、浪江町の鈴木さんが絞り出すように体験を話されました。

地震と津波の後、原発の事故が続いたが、なんの情報も得られないまま、津島・仙台・佐渡・福島市仮設・中古住宅と、先の見えない避難生活がつづいた。その中で、自らも持病が悪化し、高齢の母は寝たきりとなり1年後に死亡した。法にも守られず、被災者救済のためのはずのADRの申請は東電が6回目の拒否で打ち切られた。前町長馬場有氏含め町民の864人がすでに死亡。生活が奪われたまま避難指示解除が先行したが帰還した人は896人(1月1日)4%に過ぎない。毎時0.95 μ Svの宅地の雑木林にも固定資産税がかけられる。これは人災。核による棄民、核災棄民である。国の責任と統一された基準に基づく損害賠償等々、核災棄民の闘いは続く。皆さまのご支援を。

被災地の教育現場から浪江中学の柴口先生のお話を聞きました。

もともと400人いた浪江中学は、避難先で浪江中学として開校し一人一人を見守ってきた。今は3人となり、3月で2人卒業、もう一人の2年生も転校することになり、今年度でとうとう休校となる。6つの小中学校が正式に閉校。事故前から児童生徒数が減り、いずれと思っていたが一気に早めたのが原発事故。どこにいても、ふるさとのことも、今住んでいる所のことも、大事にしてきた。今後は直接的には浪江中にいた生徒たちに関われないが、「先生の電話番号は削除せず、出身地の事で何か言われたりしたら、相談して欲しい」と生徒に伝えている。そうやって見守りたい。

若者からは高校生平和大使、高橋さんの発言がありました。

小学校3年になる直前に、東日本大震災を体験。壁にひびが入ったり恐ろしかった。母に外で遊ぶなと言われても何が起きているのか分からず、放射能は怖いんだな位に思っていた。電気も水道も止まり、会津へ2週間避難した。家に帰ってきてもマスクをするように言われたり、外で遊べないことが何

よりも大きなストレスだった。原発が爆発したせいで私たちはしなくてもいい苦勞をした。避難指示が解除されても戻る人は少なく公園はきれいに整備されているのに誰もいない。汚染物質の処理もままならない。平和大使として広島へ行き、被爆者の体験を聞いた。「悲しいことは、私達の代で終わりにして下さい。」とおっしゃっていた。「戦争を二度と起こさないで」という意味で言われたと思うが、私は福島原発事故と重ねてこの言葉の意味を考えた。原発事故は将来の世代にまで残る汚染物質や原発の管理等様々なものを生み出した。私達の代だけでは多分解決できないと考えると原発も核兵器もすごく恐ろしいことだと実感できる。絶対原発を増やさないことや核の平和利用はいけないことなど、私たちの体験を震災を経験していない世代に伝えていきたい。

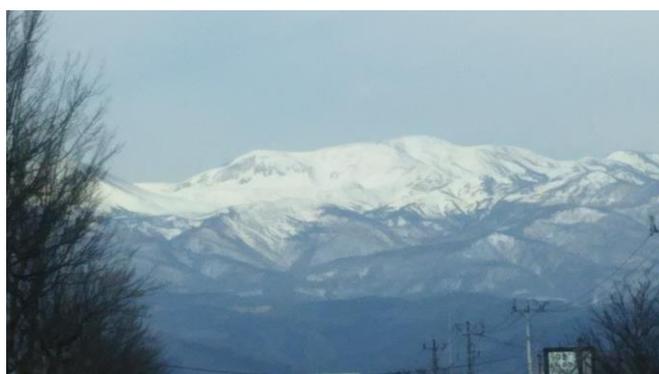
消費者団体より生協連合専務理事の佐藤さんが話されました。

いくつかの消費者団体が共同で、大学の協力も得て、土地の放射線量の実測を行い、農協と消費者が互いに協力して目に見える形で、食の安全性を点検確認している。第一次産業の復興なくして福島の復興はあり得ない。また、子供の健康については保養プロジェクト「こよっと」があり、福島と全国をつないでいる。被災者として現状を発信していく責任がある。

様々な立場の方々のお話を聞いた貴重な機会となりました。原発事故による被害や課題はまだ山積したままです。そして、事故で壊れた原発の廃炉には、今後何十年もかかります。困難や分断を乗り越え、県民の総意として、3つの「訴え」を実現させるために、引き続き運動を進めてゆかねばなりません。「被害を受けた県民にとってどのような復興が必要か」、「政府主導のリスクコミュニケーション、風評払拭安全宣伝をどう跳ね返すか」、「程度の差はあっても、県民全体が放射能の影響にさらされたことについて健康や生活を守り、将来の保障の実現に向けて何が必要か」等々、今後、さらに議論を深めることが大切だと感じました。

帰り際に角田委員長が「来年も何とか開催したい」と言われた言葉に、私たちもともに連帯してゆこうという気持ちを新たにしました。

(長沢由美)



コミュタン福島を訪ねて

久保 きよ子

福島県三春町について、子どもたちにきかれたらどう答えますか？

三春町といえば、三春駒（馬の形の人形）と、巨木の滝桜が有名です。この桜は、1922年10月12日、国の天然記念物の指定を受けた名木です。日本三大桜の一つに数えられ、樹齢は1,000年以上といわれ、樹高は13.5m、根回りは11.3m、近くから見た姿は圧巻です。

2011年の東日本大震災では、滝桜に大きな損傷はなかったのですが、観光客への十分な対応が困難であったので、一人当たり300円の観桜料の徴収を一時停止し、夜間のライトアップ、シャトルバスの運行などの中止も余儀なくされました。また、福島第一原発事故の影響で花見客が半減し、観覧料収入が大幅に減少したとして、三春町が東京電力に対し、逸失利益など約3千万円の損害賠償を求める訴訟を起こしています。滝桜の名所から近い所に2017年7月に「コミュタン福島」がオープンしました。



「三春滝桜 三春町観光ガイドブックより」

☆☆☆☆ ☆☆☆☆ ☆☆☆☆ ☆☆☆☆

私たちは3月17日、このコミュタン福島を訪ねる。

昨年、復興庁は、「放射線のホント」パンフを発行しました。復興庁は、放射線に対して、自然界のどこにでもあり、少々の放射線を浴びても健康に影響などない、怖がる必要がないと大ウソ大宣伝をしています。私たちは、原発事故によって不当きわまりない放射線を福島などにまき散らかした責任をどのように説明しているのか、また、原発事故による被ばくでリスクを負わされた子どもたちの健康をどのように保障しようとしているのか、関心を持って訪れました。

放射線が人体に与える影響は、計りしれません。多量の放射線を受けたとき、なんらかの症状が出ます。また「少しの放射線を長期的に受けた場合」今後どのような影響を与えるのか、慎重に健康を見守らなければならないのです。被災者の健康を今後とも保障する事が復興庁の仕事だと改めて思います。

この施設の宏大な敷地に驚かされました。観光バスが何十台も駐車できるスペースがあり、建物は、本当に巨大な建物で、一目見るだけで、何十億円もお金をかけたのだらうなあと想像してしまいます。

☆☆☆☆☆☆

この日は日曜日でしたが、人影は少なく閑散としていました。各部署には、コンパニオンの方々がおられ、私たち4名のために丁寧に対応してくれました。

360度見渡せる映像体験の環境創造シアターでは、「放射線の話」「福島ルネサンス」「福島の美しい四季折々の風景、勇壮な祭り」「これからのエネルギー」など、大迫力でしたが、車酔いの気分にもなりました。

次に放射線の可視化、自然放射線はどこでも降り注いでいますよ！と、放射線を最新鋭の装置を使って見せていました。私も初めてでした。（この装置、維持費がかかるため、ここにしかないとのこと。）

この施設を見学した小中学生が書いた、感想文を壁一面に張り出していました。

すばらしい施設内を見学して、やはり大きな矛盾を感じてしまいました。

それは、原発事故によって無用な被ばくを多くの人々に押しつけながら、将来をきちんと保障する制度が作られていないこと。将来を担う子どもたちの健康面を生涯きちんと保障するべきなのです。被災者に健康手帳をつくり、安心して生活できることが重要だと改めて思いました。

☆☆☆☆☆☆

交流棟「コミュタン福島」ってなあに？

【展示室】放射線について学び、福島環境創造への意識を醸成するための展示を設置します。

環境創造ラボ

環境創造へ向けて「自分ができること」、「みんなができること」への意識を醸成するエリア。

環境創造シアター

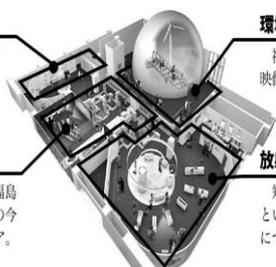
福島環境の未来像を全球型映像で体感できるシアター。

フロム3.11スクエア

原子力発電所の事故からの福島の歩みを伝えるとともに、福島の今を知ってもらおう全体の導入エリア。

放射線ラボ

知る・測る・身を守る・除く、という4つのテーマで、放射線について学ぶ体験型エリア。



福島県の施設の説明では、「福島県環境創造センター交流棟(愛称コミュタン福島)は、福島県民の皆さまの不安や疑問に答え、放射線や環境問題を身近な点から理解し、環境の回復と創造への意識を深めていただくための施設です。

コミュタン福島には、放射線やふくしまの環境の現状に関する展示のほか、360度全球型シアター、200人収容が可能なホールなどを備えております。

コミュタン福島で得た学びや体験から得た知識や深めた意識を、子どもたちや様々な団体が共有し、それぞれの立場から福島の未来を考え、創り、発信するきっかけとなる場を目指します。」と、あります。「福島県の宣伝パンフより」

～さよなら原発 2019 関西アクション～

今年も3. 11が迫ってきた3月9日、大阪ではエルおおさかで集会がもたれました。集会とデモを併せて800人が集まりました。

集会は、城南信用金庫顧問の吉原毅さんの講演で始まりました。

「(私は) それまでは、金融の一角、全国で85店舗を擁する信用組合で、地域や経済に自らの役割を果たすことに何の疑問もなかった。しかし東京で、3. 11の衝撃をまともに受け、一つ一つ、現実的な課題に迫られた。

津波で多くの人々が亡くなり、被災地のみならず東北関東全体が停電や交通機関の麻痺にあう。続いて思いもよらない原発の事故。放射能は被災地を広く覆った。事故時には、例えば、若い職員を急いで避難させなければという思いと、100万人の地域のお客様を見捨てることはできないという判断に迫られた。地域に支えられていた被災地の信用組合のいくつかは、「地域自体」が無くなることに直面した。関東でも江戸川の浄水場が汚染され、飲み水からセシウムが検出され、子どもには飲ませてはいけないとの指示が出た。お客様にお茶が出せない。ペットボトルを買い占めるのか？しかし、企業がお客様のために買い占めると乳児幼児に回らなくなるから、これはしてはいけないと判断した。

未だにふるさとに帰れない多くの避難者。除染されたとはいえ、入っては行けない場所、キノコを食べてはいけないところは広範囲。遠く関東でもホットスポットが点在する。

事故直後、フランスは3機の飛行機を手配して国民を避難させた。アメリカも逃げた。日本は情報を隠蔽し国民を被曝させた。全てが一瞬で奪われたのに、専門家も国も東電も謝らない。こんな事があってはならない。」

「敵(企業・財界)とお思いかもしれませんが」(ここでちょっと笑いをとり)「国民運動としてみんなの幸せのために、原発ゼロ・自然エネルギー推進に、今こそ進みましょう！」と、思想信条を超えて、国民運動として原発を止めようと締めくくられました。

続いて沢井正子さんの「核燃サイクルの終焉」講演がありました。

「核燃料サイクルが破たんしていることは明白。

ドイツでは、核燃料サイクルを一ヶ所に集める計画があったが、それも中止になった。また、最終処分場として、核のゴミを一番安定しているといわれている岩塩層に埋めたが水が侵入し、結局危険な廃棄物を取り出さねばばらなくなり、取り出す方法に難渋している。」

被災者から、関西に避難されている浪江町の菅野みずえさんのお話。

「あの日、住民にはなんの情報もなく、2～3日で帰れるといわれて避難所から避難所を転々とした。放射能の心配だけではなく、家族がバラバラになり、仕事もふるさとも失った。明らかな人災なのに、改められることなく原発の再稼動が進められる現状。私たち高齢者は、もうなにも怖くないはず。きっぱりと声をあげましょう」と、菅野さんは会場に、はっぱをかけられました。

最後はカテリーナ・グジーさんの歌を聞きました

カテリーナさんは「チェルノブイリ原発事故の1か月前に生まれたので、チェルノブイリの事故の体験はないのです。」と話されました。「私たちも(浪江町の被災者の方の発言を受けて)同じです。3日で帰ると言われて、突然バスでプリピャチの町を離れたと、ママに聞きました。そして33年たちましたが帰れることはありません。」

お話を聞いてから歌を聞くと、透き通るような声に、ふるさとや人生について、深い思いが込められていることが伝わってきました。デモの時間が迫っていましたが、ずっと聞いていたい歌声でした。

集会後は元気にデモに出発。バザーの場所も入り口正面だったので、「放射線のホント」の署名もとれたし、田中農園の干し柿もよく売れました。
何をしても声は届かない悔しさの一方で、時代はとっくに脱原発。節目を考える集会でした。

チェルノブイリ被害者である「移住者の会」代表ジャンナさんから 3. 11の連帯のメッセージ！！



日本の友人の皆さま

今日3月11日に際し、ベラルーシの私たちは皆さんとともに、2011年にフクシマで起こった悲しい出来事、何十万人もの人々の生活に被害を及ぼし、変えてしまったその出来事を思い起こしています。

ベラルーシのチェルノブイリ原発事故被害者と日本のフクシマ原発事故被害者は、私たち自身、そして私たちの子どもたちや孫たちのために、よりよい未来を望んで互いに助け合いましょう。

ベラルーシでチェルノブイリ原発事故被害を克服した経験が、私たちの日本の友人たちがフクシマ原発事故の被害に立ち向かうための一助となることを願っています。

皆さまと、皆さまが愛しんでいる方々の健康を祈願致します。

ジャンナ・フィロメンコとチェルノブイリ被災地からの移住者
マリノフカ地区、ミンスク、ベラルーシ

2019年3月11日

カンパ・会費の納入ありがとうございました！

(2019.1.30~2019.4.4)

田原良二 馬庭京子 相沢一正 藤田達 即得寺 田川克孝 中村愛恵 加藤純子 中山一郎
森本良子 稲田みどり 山崎知行 杉本泉 畑中宏子 岡部修子 佐藤みえ 碧海宏 立間節子
坂岡隆司 熊沢滋子 宗泉寺 旦保立子 金子龍太郎 小林まゆみ 松田高志 安田美津子 折口
信夫 村田三郎 久保きよ子 田中章子 振津かつみ 猪又雅子 中田昌 木村英子 高木祥吾
向井千晃 谷岡文香 堀口眞也 (順不同・敬称略)

フクシマからチェルノブイリへ

～チェルノブイリ原発事故の被災地を訪ねて（第2回）～

昨年10月26日から11月6日にかけてチェルノブイリ被災地を訪問した福島県の「訪問団」からの続報です。前回のジュラールに引き続き掲載いたします。

原発事故の国家補償「チェルノブイリ法」の下で

中村孝太郎
福島県石川町議員

東京電力福島第一原発事故から7年が過ぎ、国も東電も福島原発事故をなるべく小さく、責任もなるべく小さくと不誠実な態度に終始しています。

福島原発事故があって、チェルノブイリの原発事故が改めて記憶の中に蘇ってきました。事故から



クラスノポリエの障害を持つ子供たちのリハビリセンターを視察。(中央が中村さん)

32年の取り組み、そして今日の状況なども気になっていました。振津先生からのお誘いがあったので、この機会を逃してはと、佐藤君と角田君と3人で10月26日から11月6日までの日程でチェルノブイリ原発事故の被災地であるロシアのブリャンスク州ノボジブコフと、ベラルーシのゴメリ州ナローブリア、モギレフ州クラスノポリエを訪問してきました。

私には、チェルノブイリ原発事故の実像、低放射能の人体への影響、次世代への影響、放射能教育、住民の健康管理や保障などについて、「見て・聞いて・学ぶ」ことの目的がありました。

＜ロシアの被災地ノボジブコフの「ラディミチ」訪問～保養キャンプ、診療所など＞

10月28、29日はノボジブコフで、チェルノブイリ原発事故の被災者を支援するNGO「ラディミチ」と、このNGOが運営する「ノボキャンプ」の活動を見聞してきました。ラディミチは、チェルノブイリ原発事故で被害を受けた人々、特に子供たちの支援などの事業をしています。「ラディミチ」本部には、チェルノブイリ原発事故の写真や資料と共に福島原発事故の写真や出版物なども展示してありました。

「ラディミチ」本部のある汚染地ノボジブコフから、非汚染地域にある「ノボキャンプ」へ移動する道中のある村で、地表の放射能線量を測定すると毎時0.6ミリシーベルトありました。夏には「ノボキャンプ」へ放射能汚染地域の子供たちが保養に来ます。ロシアだけでなくベラルーシなどからも来ます。教員養成専門学校の学生たちや卒業生がボランティアで協力します。夕食をご馳走になりながらスタッフやボランティアの人たちと交流しました。

翌日は「ラディミチ」本部内の診療所を見学。ここではドイツのボイダ療法で障害のある子供たちの治療も行っており、ロシア全土から治療に来ているとのことでした。

<学校、衛生局～長期間の放射能汚染調査が必要>

ノボジブコフでは、周辺の村の小学校と街の中学校を訪問しました。また、衛生局も見学しました。衛生局では、放射能測定器やホールボディカウンターが備えられており、住民はいつでも誰でも測定してもらうことができます。セシウムについては年間約 1000 のサンプル（個人生産、採取の作物）を測定するという計画があって、それに従って測定しています。セシウムだけでなくストロンチウムも測定しています。コルホーズ（集団農場）の生産品は、家畜局に別の放射能測定所があるので、そこで測定



ノボジブコフ郊外の学校

しています。土壌の検査は別の政府機関が行っています。野生動物やキノコなどは今でも汚染が高く、畑の作物でも基準値を超えるものは食べないように指導しています。長い期間の調査が必要と考えているとのことでした。

<事故処理業者らと面談～様々な健康問題を抱えている>

「ラディミチ」では、チェルノブイリ原発事故の処理に携わった業者や汚染地域の健診を担当している医師とも交流しました。事故処理業者には軍人（予備役を含む）が多く、事故の情報が知らされないまま事故炉のすぐ側で行った処理作業の内容が話されました。健康被害については、ガンばかりでなく循環器疾患、白内障、精神的なストレスもあり、30 年過ぎても健康への影響があるとのことでした。定期的な健康診断を受け、年金が 50 歳からと繰り下げ支給されるなど、事故処理業者への保障はされています。事故処理業者が健康なはずもないのですが、「福島よりはマシかも」（彼らは「国家公務員」であり、「チェルノブイリ法」の下で、最低限の生活と健康管理・医療が保障されている）とのことでした。最後に「ラディミチ」のスタッフと夕食を食べながら交流、夜行列車でモスクワへ戻りました。

<「自分のためには何も求めない」と言うパーベルさん>

ラディミチの創設者で元代表パーベル・ブドビチェンコさんは教員養成学校の教師でした。チェルノブイリ原発事故の情報も少ない中で、老人や障がい者など様々な事情で移住できない人たちの救援のために献身的に活動されてきました。「私自身には何も必要としない、私には何もいらない。」というパーベルさんの姿に教員養成学校の学生たちが共鳴し、ドイツやフランスの医師など多くの人たちにも協力の輪が広がったものと思います。「自分のためには何も求めない」と言うパーベルさんの言葉に多くのことを学ばされました。

<ベラルーシのミンスクへ～「民族の遺産」を残す努力>

10 月 30 日、モスクワからミンスクまでは飛行機で約 1 時間 30 分、「移住者の会」のジャンナさんが出迎えてくれました。

ホテルにチェックインする前に「古代ベラルーシ文化博物館」の一画にある「チェルノブイリ展示」

を見学しました。原発事故で住民が住めなくなり強制移住させられた地域は、国が管理しています。そのような高汚染地域に人々が戻って暮らさないように、家屋などが壊されています。それで収集可能なうちに、それまで長年にわたって住民が生活の中で使用してきた物を記憶の中から無くならないようにと、1991～99年にベラルーシ科学アカデミーの美術・民族史学・民俗学研究所の調査団が23回にわたって居住が禁止された地域に入って収集し、民族の遺産として保管しているとのことでした。

<汚染地ナローブリアに向けて>



ナローブリアに向かう途中(ゴメリ州)の道脇の森に放射能汚染を知らせる標識

10月31日、ジャンナさんの故郷のナローブリアへ移動。途中でキノコ採りの親子に出会いました。キノコは放射能の影響を最も受ける山菜ですが、ベラルーシでは日常的に食べるものです。

道路の沿線にはロシアからの石油パイプラインが通っていました。ヨーロッパ最大級の石油精製工場がこの近く(ゴメリ州のモズィリ)にあり、ヨーロッパ各国に送られているとのこと。(石油精製業は、ベラルーシの主要産業の一つになっている。)ヨーロッパの国々がロシアとの関係を断てない事情を実感しました。

道路の脇には森林に入ることを規制する立札が所々にあって、立札には「放射能汚染、キノコや木の実の採集禁止、放射能を量って下さい」と表示されています。入り口で放射線を測定すると、地表約1メートルで毎時0.27 μ Svシーベルト、地表で毎時1.24 μ Svシーベルトでした。

<ナローブリアで病院・衛生局・学校など視察～30年経っても放射線防護が必要>



学校の歴史博物館では、子ども達が展示の説明してくれた

ナローブリアに着くと休む間もなく、区役所、衛生局、病院、小学校を訪問。

衛生局ではドミトリー所長と懇談しました。衛生局には住民のための放射能測定所があり、自宅で栽培した作物や、家畜のミルクなども測定し助言も行います。食料品だけでなく、住民の内部被ばくの検査なども行い、医者との連携もとっているとのこと。30年過ぎても放射線防護対策はしなければならない、その努力は今後も必要と所長は話していました。

病院ではインナ・コーハナ院長の話を聞きました。子どもは年1回健康診断を受け、保養にも行きます。健診の内容は、小児科をはじめ各科の診察、心電図、血液検査、ホールボディカウンターなどが含まれ、大人の健診も推奨しているとのこと。病院と学校は連携して子どもたちの健康管理に取り組んでいます。甲状腺工コー検査も続けています。(注:現在の子どもたちは事故による放射性ヨウ素の被ばくはしていないが、内陸

の国ベラルーシではヨード不足による甲状腺腫などの早期発見が必要。) 妊婦の異常出産もあり、汚染地域では事故当時の子どもに発達障害や先天性異常もあったとのこと。検査・治療は無料、治療以外には、診断書が出れば手当が出るなどの支援があるとのことでした。

小学校には、石器時代から戦争、チェルノブイリ原発事故などの資料を集めた資料室があって子供たちの教育に活かしています。

<汚染ゾーン～30年以上経ってやっと試験的土地利用を開始>

11月1日、汚染ゾーンの視察。許可と案内がないと入れません。強制移住地区となった汚染ゾーンの中に、ジャンナさんのおばあさんの家があったチェシコフ村があります。まず、その村を訪ねました。汚染ゾーンの中では森林保護局の職員が火災防止などのために森を伐採し、その伐採木で試験的に家も建てていますが、伐採木は汚染ゾーン外へは出しません。養蜂やリンゴの植樹、馬の放牧、牧草地も、最近、試験的に始めたばかりです。放射能の影響を調べながら、土地の再利用を試みているのかもしれませんが、ゾーン内の道路で放射線を測ったところ、地表約1メートルで毎時0.6㏩シーベルト、地表面で毎時1.35㏩シーベルトありました。ウクライナとの国境まで5キロメートル、チェルノブイリまで35キロメートルの検問所まで案内されましたが、勿論そこから先の汚染地区に入ることはできません。事故後32年たってもこの状態であることに、原発事故と放射能被害の重大さを改めて実感しました。



試験的に開始された土地利用。リンゴの苗木の植樹のお手伝い。(中村さんは右前スコップを持っている)

ナローブリアの町から汚染ゾーン内の道路を通らないと行けないキーロフ村の学校なども訪問しました。ナローブリアへ戻る途中の道路の地表面では毎時0.78㏩シーベルトを観測しました。その後、ナローブリア地区資料館も訪問。原発事故で消滅した町や村の名を書いた札などが展示されているコーナーがありました。

夜はジャンナさんの友人のクラウディアさん宅で夕食を頂きながら交流。終日、私たちに付き添ってくれた、案内役のインナさん(教育局の職員)が、ベラルーシで建設されている原子力発電所の是非についての質問に、「No」と言うように首を振ったのが印象的でした。

<クラスノポーリエへ～障がい者センター、幼稚園、博物館、衛生局>

11月2日、早朝5時にナローブリアを出発。ゴメリを通りクラスノポーリエへ。クラスノポーリエの案内は、ナジェーダさん(小児障がい者センター所長)と夫のヴァロージャさん(教育局職員、教職員組合委員長)。教育局を表敬訪問して、ソーヌチカ幼稚園、小児障がい者センター、成人の障がい者センターを見学しました。幼稚園のお昼寝はベッドです。言語障害の児童には専門の職員が配置されるとのこと。成人の障がい者センターでは利用者とスタッフの方々が手作りのお菓子で歓迎してくれました。身体障がい者は普通学校へ通学しますが、特別のプログラムを作り、心理カウンセラーを配置、重度の子どもは家庭で学校の先生が訪問指導するとのこと。障がいのある子どもを持つ親には介護手当や

子ども手当、年金などの制度があるとのことでした。

幼稚園の設備や保育態勢、障がい者・障がい児に対する福祉政策など、子ども達のための環境は、日本より細かく配慮されていると感じました。

午後には博物館と衛生局を訪問。博物館には民族資料やパルチザンの資料と共にチェルノブイリ原発事故の資料が展示されています。

衛生局は環境や食べ物のモニタリング、キノコや木の実、野菜、野生の動物の肉なども測定、モニタリングの結果はサイトや新聞などで周知しているとのこと。国の方針とプランがあって、それに基づいて家庭を訪問して、被ばく防止のための調理の指導なども行っており、30年間続けているとのことでした。放射能に対する考え方は、基準値を超えてなくとも測定をする、人が食べるものはすべて調べた方がいいということでした。

夜は案内してくれたナジェーダさんと彼女の夫のヴァロージャさん、付き添いのジャンナさん、運転手のスターズさん、通訳の松川さん達とともに会食。ヴァロージャさんは釣りが大好きで、話しが弾みました。「ソビエト時代と今はどうですか」の質問に、ヴァロージャさんは「昔の方がよかった」と。またナジェーダさんも同意して「ソ連崩壊後、各共和国がバラバラになり協力関係がなくなってしまったのが残念…」と応えました。

<学校訪問～「チェルノブイリ」を伝え、放射線防護を教える放射線教育>

11月3日は、2つの学校を訪問しました。ギムナジウムと「普通の」学校です、2校とも小学校と中学校と高校が一緒です。なぜ同じような学校が2つあるのかは分かりませんでした。両校とも非常事態省チェルノブイリ原発事故被害対策局が生徒向け、教師向けに作成した教科書を基にチェルノブイリ事故のこと、放射能のある環境の中で被ばくをできるだけ避けながらの生活の仕方、放射線教育がされています。ギムナジウムの方が化学や物理、生物、環境などの教材や顕微鏡などの器材が整っているように見えました。「普通の」学校では高学年の生徒たちがスライドを使いながらチェルノブイリ事故についてプレゼンテーションを披露してくれ、低学年の生徒が歌や踊りで歓迎してくれました、とても友好的な歓迎に感謝しています。

<ベリニチの障がい児の寄宿学校～社会参加へ向けた制度と環境>

午後、クラスノポリエを発って、ベリニチ（モギレフ州の汚染地の町）の障がい児・寄宿学校（インテルナート）を見学しました。知的障害や精神障害、視覚障害、言語障害など様々な障害のある子どもたちが寄宿して学んでいます。発達障害は「障害」とはみてないとのことでした。この学校の目的は、障害を持つ人たちも社会の中で人生を生きていけるようにすることで、教育と職業訓練が重点とのことでした。社会参加のために、夫々の個性に合わせて、農業や菓子製造、養蜂、縫製、大工、左官など様々な訓練科目があり、買い物など社会生活の訓練もあります。自宅で暮らしている障がい者は、教育局の車で送り迎えして通学もします。軽度障がい者は普通学校に通います。障がい者に対するハンディを減らすための制度や環境は日本より整っていると感じました。

今回、小児や成人の障がい者センターや障がい児の寄宿学校も訪問させていただき、ベラルーシの障がい者政策は見させていただきました。しかし、遺伝子や染色体に対する影響など、チェルノブイリ原発事故による次世代への影響について、どのような取り組みがなされているのかについて伺う機会がなくて残念でした。

<「戦争の傷跡」を残すハテイン村>

11月4日、最終日です。ミンスク郊外のハテイン記念施設へ案内してもらいました。ハテインは第二次世界大戦でドイツ軍によって26戸の全住民（149人、うち75人が子ども）が一つの小屋に閉じ込められ焼き殺され消滅した悲惨な村です。ハテインの野外博物館には、ベラルーシ全土の、ドイツ軍によって同じ運命をたどった186の村の石碑と多くの都市の名と犠牲者の数が刻まれた石碑が並んでいます。涙が出ます。ベラルーシは第二次世界大戦で全土が戦場になりました。国民の4人に1人、200万人以上が犠牲になったのです。道路のあちこちに記念碑が立っています。激しい戦闘のあった場所です。戦争だけは絶対してはならないと心底思いました。



ハテイン村の記念公園

<「移住者の会」の方々との交流～故郷に戻れず、被ばく被害と向き合い続ける>

ミンスクに戻り市内見学をしました。友好都市仙台の記念公園。チェルノブイリ原発の事故処理作業者を追悼するために建てた教会、ここには広島の実験用被爆敷石が保存されています。ミンスク市内にはロシア社会民主労働党第1回大会が開催された建物が残っています。長崎・広島・福島が埋まっているカソリック教会も見学。そして買い物。

夜は、ジャンナさん宅で「移住者の会」の皆さんと交流しながら夕食。事故当時は何も情報はなかったため、子どもたちは何も知らずに外でメーデーの行進の練習をし、大人は外で農作業もしていたということです。事故からしばらくしたある日、「強い風と共に黒いほこりが降ってきた。二度目の爆発を経験した。」と言う人もいました。子どもたちは頭痛や吐き気、倦怠に襲われたそうです。ある移住者の方から、息子さんは脊椎の障がいがあり人工骨を挿入する手術をした、事故後に妊娠して生まれた娘は腫瘍ができて手術をしたということを知りました。「移住者の会」の人々は、事故の5年後に「チェルノブイリ法」ができて、やっとミンスクに移住をすることができました。事故後5年間は高汚染地に住み続けなければならなかったのです。そして、30年近くも移住生活を強いられ、放射線被ばくの影響と付き合わなければならぬ状態が続いています。ある移住者の方は、自分の辛い体験談を「チェルノブイリのような事故は、地球上のどこにももう起こってほしくない」という言葉で結びました。

<民間放射能研究所「ベルラド」>

11月15日、モスクワに向けてミンスクを発つ前に、民間放射能研究所「ベルラド」を見学、ネステレンコ所長が出迎えてくれました。核物理学者で移動式の原子炉を設計した前所長（現所長の父親）が設立しました。創設者ネステレンコは、チェルノブイリ原発事故後、原子力利用推進に反対の立場を取るようになり、ソ連やベラルーシ政府の政策にたてついたために、拷問に近い扱いを受け、職を追われましたが、様々な弾圧を受けながらもこの独立研究所を設立したとの事です。研究所では約30人のスタッフが働いています。線量計の設計や汚染の検査、体内セシウム蓄積の検査、ミルクやキノコなど食物の検査、移動式の測定車でベラルーシ各地の汚染地の放射能測定などの活動を行っています。今もベラルーシ政府とは難しい関係にあるとのことです。

<「チェルノブイリ法」による被害者への補償～日本での闘いの重要性を改めて実感>

ノボジプコフ、ナローブリア、クラスノポーリエと、チェルノブイリ被災地を訪問し、様々な施設や取り組みを見学してきました。困難なことも沢山ありますが、ロシアもベラルーシも「チェルノブイリ法」があって、不十分であるにしても政府が法律で労働者や被害者である国民の福祉や健康管理などを保障し、原発事故被害に対して国が補償をしていることを知りました。チェルノブイリ原発事故は第二次世界大戦に並ぶ国の惨劇であったこと、放射能のリスクからの防護が必要なことなども、学校教育で取り上げていること、32年経った今でも放射能による自然環境への影響調査を継続していることなど、日本の対策と全く違うということを確認しました。東電福島第一原発事故の国や東電の責任・補償の追及、原発事故被害者救済の法制化、脱原発の実現に向けた闘いなどの重要性を改めて強く感じました。訪問中お世話になった皆さんに感謝申し上げます。皆さんにまた会いたい気持ちです。



(前回の続き)

「移住者の会」のジャンナさんと ベラルーシで再会

佐藤龍彦

モスクワから飛行機で二時間余り、ベラルーシの首都のミンスク空港に着きました。出迎えてくれたジャンナさんと再会の喜びに浸ること一時余り、早速ジャンナさんの案内で市内にある博物館を視察。古代ベラルーシを研究している科学アカデミー文化芸員の説明で、チェルノブイリ汚染地に残り残された貴重な遺産を収集した展示物を見学しました。チェルノブイリ30キロ圏内の立ち入り禁止地域にあった村からの収集物で、漁具類や機織り機、農具、衣装類、大工道具類、甕、土瓶など、その他古くから伝わる家具類などが所狭しと展示されていました。

その後はホテルにチェックイン、しばし休憩した一行は、ジャンナさんから夕食の招待を受け、ジャンナさん宅を訪れました。ジャンナさんが住むアパートは、チェルノブイリ汚染地から移住してきた被災者が住む集合住宅地マリノフカ地区にあり、幾つもの棟が立っていました。早速、各部屋を案内され、イコン（聖母マリヤ像）と夫の遺影、壁には子どもさんたちの写真が所狭しと飾られ、来日の際に持ち帰った飾り物も吊るされてありました。翌日からベラルーシの汚染地域を終日案内してくれる予定のジャンナさんは、高汚染地域からの「移住者の会」代表で、日本にも3回訪れ、福島原発事故以降は2度

被災地を訪ね、チェルノブイリ原発事故後の被災の状況や「移住者の会」活動の報告をするなど、活発な活動を展開しています。私も福島訪問の度にお会いし、最も近い人です。

私たちを迎えるために早朝より準備をしたのでしょうか。盛り沢山の手作り料理に、余りある歓待であり、「ワー」とばかり、一時数々の料理に話題が集中しました。ひとときの歓談をすました後、ジャンナさんは急ぎ「移住者の会」の活動を紹介し、「この地区に移住して来た移住者の氏名、家族構成、出身地、住所、身体障害の有無、老人・子どもの健康、その他を、一軒一軒訪問して調査し、保養や、支援対象者のニーズに合わせた物資の分配を行うなど、様々な世話役活動を行なってきた」と述べ、ノートに書き込まれた膨大な調査資料を見せてくれました。



ジャンナさん宅で。福島でプレゼントした佐藤さんのお母さん手作りのくす玉がリビングに飾られて

ジャンナさんはゴメリ州ナローブリア地区出身で、1958年生まれの61歳、現在は移住したミンスク市に居住し、身体障がい者の長男と二人暮らし。ジャンナさんは両親と、近くに住む祖母と共に、自然の恵みが豊かな森と広大な大地に抱かれ、プリピャチ川に注ぐ小川に戯れ幼少を過ごしたと生い立ちを語ってくれました。

「活発で元気な幼少時代を過ぎ、やがて地元のチェシコフ高等学校を卒業してキエフ市（現ウクライナ）にある食品工科大学に入学。卒業と同時に結婚して郷里のナローブリアに夫と共に帰ってきた。地元の食品公共組合に就職して二人の息子を育てた。夫もナ

ローブリアの街を気に入って幸せな日々を暮していた。

1986年4月26日、突然の悲劇が襲ってきた。チェルノブイリ原発事故について、当初は心配ないと報じられていた。次第に自分の住む地区が密度の濃い汚染地とわかり、子どもを連れて原発に近い祖母の家に避難した。5月始め、集団避難命令が出て子どもの避難に付き添い実母と姑、祖母二人も一緒にミンスクに避難。5歳と2歳の子どもたちが親元を離れ、子どもたちだけで検査を受け、一カ月余り入院していた。私は仕事の関係で付き添うことが出来なかった。上の子（長男）が高熱を発し、てんかん発作が起きるようになった。

ナローブリアでは家屋、学校、道路などの除染が始まった。除染作業が必要になったことから、住民は放射線量が高いことに気づきはじめ不安と心配が交錯していた。30^キ圏内の強制移住も知らされ、住民からは移住を求める声が上がっていた。1991年の『チェルノブイリ法』制定により移住の権利が認められて、ナローブリア地区80世帯がミンスク市に移住した。長男が身体障がい者だったので優先的に移住の権利が認められた。子どもの治療を考えての決断だった。夫も移住を求める活動をした。

やっと移住したのに、1993年に最愛の夫が亡くなった。夫は高校時代に知り合った初恋の相手、工場職人だった。辛い時期だった。ソビエト崩壊に伴う政情不安やインフレによる物価高は暮らしを直撃した。配給制となり配給食品カードが必要だった。今でもその配給カードを持っている。夫の死因は放射能に起因したものと思っている。学校の教頭でナローブリア地区に残っていた母も亡くなり、義母も

ミンスク市に移住していたが亡くなった。家族が相次いで他界し本当に辛い、つらい毎日だった。祖母は事故前の1982年に亡くなっていた。そんな矢先の『移住者の会』の設立、必要に迫られての発足（1993年）だった。」

持ち前の明るさと世話好き、押しの強さを発揮するジャンナさんは「移住者の会」のリーダーに最も相応しく、皆から支持されて代表に押されたとのこと。会は毎週一回の定例会議開催を実施しながら上記の活動を展開してきました。ジャンナさんは、ヨーロッパや日本など国外からも招聘され、チェルノブイリ被害の体験を語り、原発事故被害の実態を訴えてきました。

ミンスクからウクライナ国境に近いジャンナさんの郷里ナローブリア地区まで500km余り、車で走ること7時間を要します。翌朝は雨、ミンスク市街は霧雨で霽に覆われ、漆黒の闇に光る常夜灯を尻目に次の視察予定地であるジャンナさんの郷里ナローブリア市に向いました。運転手は車とともに手配した専属のスターズさん。若い気さくで気配りの効く好青年でした。

車窓を流れる途中の景観は、広大に開ける畑と牧草地帯がはるかかなたの地平線まで続きます。ときおり見入る松林と白樺が混林する色鮮やかな紅葉の終わりを告げるコントラストは実に幻想的です。森を縫い、どこまでも続く道路はゴメリ州にさしかかりました。車窓から見入る水面の光る川や、ジャガイモ畑、ライ麦畑、牧草が広がる大地。通り過ぎていく廃村となった家並みや、30キロ圏内からの移住者の住む村々など、ジャンナさんの説明を聞きながら一路目的地に向かいました。ナローブリアの街に近づくにつれて目に涙をためるジャンナさんの横顔が忘れられません。



【追悼】

「救援関西」は1991年11月に発足以来27年が経ちました。発足以来、多くの方々のご協力とご支援の下、ここまで歩いてくることができました。

この間、「救援関西」の礎を築き、共に歩んでくださった方々が相次いで帰らぬ人となりました。

無念であり、寂しく、残念でたまりません。ここに謹んで哀悼の意を表すとともに、これからも「フクシマを核時代の終わりの始まりに」目指して少しずつでも歩んでいきたいと思いをします。

<大田美智子さん（ぺりかんさん）・懐かしく思い出す日々>

昨年10月21日、ぺりかんさんこと大田美智子さんが旅立ちました。ぺんぎんさん（夫：大田健嗣さん）のいるところへ。今もなお「どうして」という気持ちが拭えないままです。あまりにも早い旅立ちでした。



9月に入院を知りました。骨折でリハビリ中とのこと。そうなんだと軽い気持ちでお見舞いに行ったら、少量だけど酸素吸入をされていて思った以上にシビアな状況。でも普通に良くお喋りしました。しかしその後は、病状はだんだんと思わしくなくなり、面会は短時間で「パカー（またね）」と別れていました。そしてシビアな状況ながらも数回目の面会の時はやっと回復に向かうのかなと思っていた矢先のことでした。

「救援関西」発足当初から、ぺんぎんさんともども「ぺんぎんぺりかん」として事務局メンバーを担い、試行錯誤の様々な活動を一緒に行ってきました。「ジュラブリ」を作るために神戸に通い発送作業が終わればお決まりの一杯。ぺんぎんさんともども訪問した1993年の第2回ベラルーシ訪問。絵画展のために、ベラルーシの子どもたちの絵を一つ一つ手作りの額に入れて展示できるように準備してくれたこと。チェルノブイリの子どもたちの描いた絵の絵葉書セットを

沢山売ってカンパを集めてくれたこと。一緒に救援バザーをしたこと。何度も、ぺんぎんとぺりかんのぬいぐるみや人形で埋もれているお宅にお邪魔したこと。そして、阪神・淡路大震災の折には自らも被災者でありながら、物資の支援など他の被災者の支援をしていたこと、その震災を体験しているただなかで、人災である放射能汚染が加わったチェルノブイリの被害者に想いを巡らしていたこと等々。あの華奢な身体の中には「繰り返さないで、チェルノブイリ」と脱原発への強い思いが秘められていました。まさにこの活動をとうして「社会奉仕で信仰を全う」していたのでしょうか。

事務局を離れた後も事あるごとに協力していただき、「救援関西」を支え続けてくれていました。

「また食べに行こう」という約束は果たせぬままになってしまいました。今はぺんぎんさんと共に安らかにと願うばかりです。そしてもうこれ以上「繰り返さないため」にも脱原発に向けて歩いていかなければと思います。

（猪又雅子）



＜「クラスノポーリエの母」ベーラさんと「核の無い世界」をめざして共に歩む＞

今年の1月3日、ベラルーシのチェルノブイリ被災地クラスノポーリエの小児科医、ベーラ・ルソーバさん（享年75歳）が永眠されました。チェルノブイリ原発事故の前からクラスノポーリエの病院の小児科医として長年にわたり働いてこられたベーラさんは、この地区で生まれ育った子どもたち全員をよくご存知で、地区の誰もがベーラさんを「クラスノポーリエの母」と慕っていました。ベーラさんは、子どもたちの健康と成長を見守り続け、子どもを育てる親たちを支え、そして幼稚園や学校の先生たちの良き相談相手でもありました。私たち「救援関西」にとって、ベラルーシのチェルノブイリ・ヒバクシャとの「交流の要」となって下さっていたベーラさん。もうお会いできないということが、私たちはまだ実感できずにいます。それは、私たちがベーラさんとともにめざしてきたこと（ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリを繰り返させない。ヒバクシャ、特に子どもたちの健康と生活を守る。）が、まだ道半ばだからかもしれません。



1991年11月に私たちは「救援関西」を立ち上げ、翌年の春に初めてチェルノブイリ被災地に代表派遣をした際に、ミンスクで開催されたチェルノブイリ支援NGOの「国際会議」でベーラさんを紹介されてクラスノポーリエを訪問しました。これが「救援関西」とクラスノポーリエとの27年にわたる交流の始まりとなりました。そして同年秋に私たちは、初めての「チェルノブイリ・ヒバクシャ招聘・交流」に取り組み、ベーラさんと、隣接地区チェリコフの教師バーリャさん（2012年、乳がんの術後に肺梗塞で永眠）を日本にお招きしました。お二人は、関西各地と原発立地県の福井で、チェルノブイリ被害の実状と「繰り返さないで！」という想いを訴えて下さいました。また、被爆地・広島も訪問し、原爆被爆者の方々とも交流されました。この取り組みは「救援関西」の支援・交流の輪を大きく広げる第一歩となりました。

以来、ベーラさんは、バーリャさんとともに、私たち「救援関西」のベラルーシ現地での受け入れとコーディネートをずっと担って下さいました。小児科医として、地区の子どもたちとその家庭を知り尽くしていたベーラさんは、私たちのささやかな「支援」が、地区で最も支援を必要としている子どもたち～経済的に困難な家庭、子どもの多い家庭、都市の病院で大手術や入院治療を受ける子どもの交通費や、付き添いの費用が必要な家庭（ベラルーシでは医療費は無料だが、付随費用は個人負担）、等々～に、直接に届くように、常に配慮して下さいました。そして、家庭訪問や施設訪問などを通じて、支援を受け取った子どもたち、ご家族、施設のスタッフと私たちが「顔の見える」関係で交流を深めることができるよう、きめ細かくコーディネートして下さいました。また、私たちのささやかな「支援」は、ベーラさん自身がクラスノポーリエでなさる医療活動や子どもたちの見守りにも、大切な役割を果たしていたのではないかと思います。医薬品・医療機器・ベビーフードなどの支援、衣類や学用品などの救援物資の送付、子どもたちの保養支援など、「救援関西」がしてきた支援は、その都度、現地の実状に即して何が必要かをベーラさんと話し合い、一緒に考え、取り組んできたものです。

この27年間、ベーラさんとともに歩んできた中で、様々な思い出が語り尽くせないほどあります。クラスノポーリエにはいつもベーラさんがおられ、ご家族で歓迎して下さい、毎年の訪問でベーラさんにお会いするのがとても楽しみでした。様々な困難もベーラさんとともに乗り越えてきました。ベーラさんという信頼できる確固とした存在がおられたから私たちの活動がここまで続けられたと言っても過言ではありません。

ベーラさんは1992年の初来日、チェルノブイリ事故10周年・20周年、そしてフクシマ事故の翌

年の2012年も含めて5回（うち1回は他団体による子どもたちの「保養」の付き添いとして）来日されました。1992年のベーラさんの講演録を改めて読み直すと、放射能汚染の情報がない状況下での人々の被ばく、避難の遅れによる被ばくの拡大、汚染地域の人々の健康悪化、農業や酪農の禁止、川遊びや森の散歩も禁止、移住に伴う家族やコミュニティの崩壊、等々、人々の生活が変わってしまったことなどが話され「原発は全て閉鎖すべきです。このまま続けたら世界中どこで事故が起こっても不思議ではありません。」と訴えられています。様々なことが今となってはフクシマと重なります。

チェルノブイリ20周年の来日講演では、ベラルーシ全体とクラスノポリエの汚染や健康に関する様々なデータを調べて報告され、人々の被ばく評価、低線量被ばくの健康影響、病気の診断や治療など多くの課題を明らかにするのは何十年もかかる仕事であり、「客観的データを改ざんしない」「独立性、公開性」のある医療機関が設立され、事故被害を解明することを望むと述べられました。「すべての病気が放射線によるものではないと思います。しかし…チェルノブイリの人々の症状は精神的ストレスや恐怖によるものだとする意見には全く賛成できません。」「IAEAやWHOは、核計画に出資する、核を持つ国々」の意向を汲んで被ばくによる健康被害を少なく見せようとしていると、厳しく批判されました。そして、被ばくの影響を最も受けやすい子どもたちの健康を危惧されていたベーラさんは、世界の人々がチェルノブイリ被災地の子どもたちに支援をしてくれたことに言及され、「子どもたちが、世界中の大人たちに核について考えさせ、人間の心呼び覚ましてくれた…子どもたちを通して…原子力エネルギーの『平和利用』と『軍事利用』に対してどのような態度を取るべきかが明らかになってきたのです」と話され、講演の最後に「核の無い世界を、ヒロシマ・ナガサキ・チェルノブイリを繰り返さないこと」と呼びかけられました。

フクシマ事故の翌年来日された時には、「福島のお母さんたちが、子どもの将来を心配している気持ち痛いほどよくわかる」とお母さんたちの思いを受けとめ、チェルノブイリ事故直後の自分たちの経験をもとに、被ばくを避ける方法や日々の過ごし方などについての具体的なアドバイスをして下さいました。

ベーラさんは2014年に脳梗塞で倒れ左半身不随となり、ご家族の献身的な介護を受けながら、ほとんどベッドで生活をされていました。頭脳は明晰なままで、私たちが見舞いに伺った時には、「フクシマの子どもたちはどうしていますか。あんな事故が起こってしまって、子どもたちがかわいそう…」「日本の原発は、止まりましたか。」と尋ねられ、フクシマのこと、日本の私たちのことをずっと気にかけて下さっていました。昨年11月にお会いした時には「もう私はダメ…バーリャも逝ってしまったし、今度は私の番…」と、気弱になっておられたのが気がかりでした。思うように身体が動かず、きつと辛かったのではないかと思います。最期は、夫、娘さん、息子さん、そして孫たちに囲まれて、安らかに逝かれたことと思います。倒れて寝たきりになっても、いつもベーラさんはルソーバ家の「中心」に居られました。

私たち「救援関西」の皆の親友であり、心から敬愛する人、ベーラさん。本当にありがとうございました。どうぞいつまでも私たちの活動を見守っていて下さい。ベラルーシと日本の私たちは、ヒロシマ・ナガサキ、チェルノブイリ、そして繰り返してはならなかったはずのフクシマという「悲劇」を通じて知り合うこととなりました。しかし、その理不尽な核被害を互いに理解し、もうこれ以上「繰り返してはならない」という想いを共にしたからこそ友情を深めてきました。私たちは、ベーラさんとともに築いてきた友情をさらに深め協力し合い、ヒバクシャを支援し、「核の無い世界」の実現に向かって前進し続けたいと思います。改めてそのことを誓い、心よりご冥福をお祈りいたします。

（振津かつみ）

<中川慶子さん、突然の別れ>

悲しい報告をしなければなりません。《チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西》発足時からのメンバーで、'93年にベラルーシ交流訪問にも参加された中川慶さんが急逝されました。

昨年秋にご病気がわかり治療に努めておられましたが、体調不良のため2月初めに入院、2月23日病状の急変により逝去されました。突然の訃報に活動仲間一同、まだ本当とは信じられない思いです。

中川慶さんは、宝塚で夫君中川保雄さん（故人）と共に1981年《原発の危険性を考える宝塚の会》を立ち上げ、市民による市民のための学習会の開催や、小学校への環境出前授業など地域密着型の活動を粘り強く続け、関西地域における原発新增設の反対運動にも精力的に取り組んで来られた方です。会の発足は1979年のスリーマイル島原発の事故に危機感を覚えての先駆的な行動で、あらゆる放射線ヒバクを許さないという強い信念が彼女の原動力でした。

2011年の東京電力福島第一原発事故の後、「原発に反対するだけでは、十分じゃない」という思いで、《NPO法人新エネルギーをすすめる宝塚の会》を立ち上げ、再生可能エネルギー普及にも尽力されました。



《チェルノブイリ・ヒバクシャ救援関西》との連携活動について記すと、勤務先の大学で先生や学生さんに呼びかけて、何度もチェルノブイリ救援バザー『玻璃貴璃屋』を開催、多額のカンパを寄せられました。賑やかなバザーに私もお邪魔しましたが、中川さんが学生さんや助手さん達から信頼され、尊敬されていることが感じられました。

また、《救援関西》がベラルーシからゲストをお迎えするたびに、宝塚でお話を聞く会を持ち、救援関西メンバーの訪問報告の会も何度も開き、チェルノブイリの警鐘を市民に伝える役割を果たされました。

原発に対しては厳しい態度で反対、活動には真摯な姿勢で臨まれていましたが、みんなで作業をする時は、ゆったりした振る舞いで、おしゃべりに花が咲くと本当に楽しそうに語り、笑顔が素敵な方でした。面倒なことでも気軽に率先して取り組み、暑かったり寒かったりの街頭行動でも、熱心に通行者に声掛けを…と、どんな情景を思い出しても、中川さんが不満顔をされたのを見た記憶がありません

市民運動に参加したご縁で素晴らしい方々との出会いがあり、私にとって得難い経験と感謝しています。今は、宝塚に引っ越してから25年間ずっと頼りにしてきた、あまりに大きな存在に先立たれ、心許なさに耐えていかねばなりません。中川さんがきっと高いところから見ていてくださること信じ、なんとか活動に励みたいと思っています。

(田中章子)



